

活動状況報告（5月）

文化芸術コース 4期生 北浦 由花里

ポーランドはすっかり夏になり、20時を過ぎても外は明るく、街が賑やかになってきました。私がポーランドに到着してから7ヶ月が過ぎました。こちらにいられる期間も残りわずかとなり、研究に励む毎日です。

さて、5月のピアノのレッスンでは、私の大好きなショパンの”舟歌 嬰へ長調 作品60 (Barcarolle in F sharp minor, Op. 60)”を主に勉強していました。私がずっとポーランドで学びたいと思っていた作品です。この舟歌は、ショパンが亡くなる少し前に作曲しており、彼の晩年の傑作です。ショパンの専門家かつ私の師である、アンナ・ヤストシェンブスカ＝クイン先生 (Prof Anna Jastrzebska-Quinn) がどのようにこの曲を解釈しているのかワクワクしていました。

日本でこの作品を少し勉強をしていたことがあったのですが、特にペダル(※音の長さを保持するためにピアノに取り付けられている装置)の踏み方について分からない点がたくさんありました。特に冒頭の序奏のペダルの踏み方に対して、フレーズの流れにそぐわないように感じるペダル記号の指示があり、ずっと不自然に思っていました。しかし私の先生が、よりナチュラルなペダルの踏み替えを提案してくださり、納得して弾けるようになりました。

また、校訂者ではなく、ショパンが考えた特徴的なペダル指示もたくさん登場します。特にこの曲に関しては、ショパンの他の作品に比べて、微妙なニュアンスをつける必要があるので、ペダルには気をつけなければなりません。ショパンや校訂者が残した楽譜通りのペダル指示を守ることはもちろんですが、和音の変化を自分の耳でよく聴きながら調整していくように言われました。ショパンの楽譜は、彼の自筆譜をもとにたくさんの校訂者が編集し、出版されています。現在の世界のスタンダードは、ヤン・エキエル氏(※Jan Ekier)が校訂した、いわゆる”エキエル版”と呼ばれる楽譜です。そして、私の先生であるアンナ先生は、そのエキエル氏の弟子だったのですが、「私の先生であるエキエル先生が、この序奏のペダル指示を書いたけど、私はこの解釈が好きじゃないのよ」と笑っていました。ポーランド音楽史に関わっているような先生から貴重なお話をたくさん聞けることは、留学における価値の一つとなっています。

この”舟歌”とは、ベネチアのゴンドラ漕ぎに由来する歌です。そして、愛を語る作品です。彼の晩年は病気の症状も悪化し、かつての恋人であったジョルジュ・サンド(※George Sand…フランスの女流作曲家)との日々を思い出していたでしょう。先生からは「あなたの今の演奏に愛を感じられない」と指摘されたので、表現について考えていくのが来月以降の課題となりました。

また、5月には室内楽の演奏会に出演しました。ウクライナ人のパートナーとモーツァルトのヴァイオリンソナタ ト長調(W. A. Mozart Sonata in G Major)を演奏しました。これまでの練習では、パートナーとのちょっとしたタイミングのずれなどがあったので、二人でよく話し合いながら練習することは勿論ですが、自宅で相手のヴァイオリンパートを歌いながら自分のパートを弾く練習をしていました。その甲斐あってか、演奏会では息を合わせて演奏することができました。演奏会の講評としては、良い音や感情、ダイナミックで演奏できていたが、ヴァイオリンをよく聴いた上でのバランスをよくコントロールできていなかったようでした。普段練習している教室とは違う響きになるので、会場の響きとパートナーの音のバランスをとるのが難しかったです。これまでピアノソロを中心に勉強してきたので、今後はアンサンブルに力を入れて活動していけたらと思っています。

